



終局の宴

落合信彦

Nobuhiko Ochiai

Johann Jürgens

Elisabeth Jürgens

Richard Jackson

Wolfgang

Elke Jürgens

Erich Honecker

Petr Isikov

Egon Krenz

Gorbachyev

Otto

Franz Schreiber

Willy Brandt

Günter Guillaume

George Connors

Joachim Schmidt

Walter Wilhelm

Dick

Michael Erichman

Marianne Schmidt

Helmut

John Fitzgerald Kennedy

Khrushchov

Vladimir Kozlov

Douglas Mac Arthur

Bush

Rogin

Nicolae Ceaușescu

László Tekes

Elena Ceaușescu

Richard Jackson

Wolfgang

Elke Jurgens

Erich Honecker

Petr Isikov

Egon Krenz

Gorbachyev

Otto

Franz Schreiber

Willy Brandt

Gunter Gullone

George C. Myers

Joachim Schmidt

Volfgang Wilhelm

M. J. Schuman

W. J. Schuman

Helmut

John Fitzgerald Kennedy

Khrushchov

Vladimir Kozlov

Douglas Mac Arthur

Bush

Rogin

Nicolae Ceausescu

Laszlo Tekes

Elena Ceausescu

局
の
書
章
蘇工業学院图书馆

書き下し長編小説

しゅうきよく
終局への宴 うたげ

一九九〇年一月三〇日 第一刷発行

著者 落合信彦 おちあいのぢんこ

発行者 若菜 正

発行所 株式会社 集英社

〒一〇五 東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇

編集部 (〇三) 二三〇一六二〇〇

電話 販売部 (〇三) 二三〇一六三九三

製作課 (〇三) 二三〇一六〇八〇

印刷所 中央精版印刷株式会社

© N. OCHIAI, Printed in Japan 1990

ISBN4-08-775145-7 C0093

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写、複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

目次

プロローグ

5

PART I 逃亡

17

PART II 再会

103

PART III 作戦

147

エピローグ

221

カバーデザイン 菊地信義

カバーフォト 瀬尾明男

終局への宴

プ ロ ロ ー グ

ヨハン・ユルゲンスは窓際に立って、静かな興奮にひたりながら眼下に広がるベルリンの夜景を見降ろしていた。

ここインターコンチネンタル・ホテルに落ち着いて一週間になるが、今夜の夜景は格別だった。あちこちに火花が上り、ネオン・サインはいつもの倍ぐらいの輝きを放っている。東ベルリン側にあるテレビ塔さえこうこうと輝いている。西も東も街全体が言いようのないエネルギーにあふれているように感じられた。

東ドイツ政府が国境開放を宣言したのはつい数時間前だった。六時のテレビ・ニュースでは、すでに一万人近くの人々が国境を越えて西ドイツに入り込んだと伝えられていた。ここ西ベルリンにも、チェック・ポイント・チャリーを経た数千人が入り込んできた。

ふと妻のことが想い出された。この現実を目のあたりにしたらエリザベスは一体何と言うだ

ろうか。多分、見ても信じまい。ユルゲンス自身目の前に展開している事態を百パーセントは信じ切れていなかった。共産主義がこれほどろく崩れ去るはずがないという疑念と不安が心のどこかに残っていた。

ベッド・サイドの電話が鳴った。ゆっくりとした足取りでベッドに近づき腰を降ろした。電話は鳴り続けた。大きく深呼吸をしてからユルゲンスは受話器をとり上げた。

「ジョニー？ ジャクソンだ」

リチャード・ジャクソンの落ち着き払った声が聞えた。

「遅くなってすまん」

「待つことには慣れてるよ。それで？」

「決定だ。今夜九時」

「確かなんだな」

「ああ。東側にいるエージェントから最終確認が入った」

ユルゲンスは黙ったままうなずいた。

短い沈黙の後ジャクソンが続けた。

「これで君は堂々とチェック・ポイント・チャーリーを通れる。予定通り明日十二時にウルフガングが指定の場所で待ってる。奴の方から君に話しかける。いいな」

「わかった」

「こっちは万全のバック・アップ態勢を取っている。必要なものがあつたら何なりと言つてくれ。それから前にも言ったように連絡は二日に一度私の方からする。ただし緊急の場合は君の方からしてもよい。その場合は私のプライベート・ナンバーにすること。ナンバーは知つてるな」

「ああ」

「氣をつけてくれよ。『友人』たちも必死のようだから」

「わかつてるよ。それらしき奴がちょろちょろしている」

「尾けられてるのか!？」

「らしいな。しかし、心配ない。単なるネズミさ。多分、ゲーレンだろう。私がもともと東ドイツ人でアメリカに帰化したので目をつけてるのさ」

「奴らを甘くみるなよ」

ジャクソンが心配氣に言つた。

ユルゲンスは鼻で笑つて、

「何も悪いことをしようとしてるわけじゃない。いかにゲーレンでも手は出せないよ」

「そのオペティズムが君の命取りにならぬよう祈つてるよ」

「大丈夫、すべてうまくいくさ」

「ああ、それからもうひとつ。こんなことはあつてはならないことだが、万一君がどこかの機

関に挙げられた場合、前にも言ったように……」

「わかってるよ、ジャクソン」

ユルゲンスが少々いら立ち気味に答えた。

「私はあんた方とは何の関係もない。この仕事は単なる一元東ドイツ人としてやっているだけ。それでいいんだろう」

「確認しただけだ。それじゃ吉報を待ってる。グッド・ラック、マイ・フレンド」

ユルゲンスは静かに受話器を置いた。腕の時計は午後八時三十五分を指していた。

クロゼットからジャケットをとり出し、それをひっかけて部屋を出た。

エレベーターの前にひとりの男が雑誌を読みながら立っていた。ユルゲンスの顔に笑いが浮んだ。ヘタな変装だ。昨日はジョギング・ウェアを着ていたが、今日は三つ揃えにきめてサングラスをかけている。おとといはカジュアル・ウェアで肩からカメラをぶらさげ、観光客のふりをしていた。その時はシャルロットンブルク宮殿からオペラ・ハウス、シラー劇場など、西ベルリンの観光名所を引きずり回してやった。それでも相手は明らかに、こっちが気がついていないと思っているようだ。

ユルゲンスがその男に近づいた。男は雑誌に見入っている。ユルゲンスが彼の真前に立った。男はまだ雑誌に目を落していた。

「目に悪いぜ」

ユルゲンスの言葉に男が顔を上げた。何も言わなかった。

ユルゲンスがかまわず続けた。

「ここは暗すぎる。それにあんたにはサングラスは似合わないよ。ついでに言えば、その三つ揃えもだがね。きのうのジョギング・ウェアの方がよほどいいよ」

男がゆっくりとサングラスをはずした。少々つり上った目と四角いアゴに特徴がある顔立ちだった。

ユルゲンスがその冷たい目ざしで男を見つめた。その灰色の瞳で見つめられただけで大体の人間はびびってしまう。しかし、その男は違った。その不敵な面がまえには笑いさえ浮んでいた。

ややあつてユルゲンスが、

「どうだね。ここらへんで自己紹介といこうじゃないか、ええ？」

男は何も言わず、ただユルゲンスを見つめていた。

「私の名はジョン・ジャーゲンス、ドイツ名はヨハン・ユルゲンス。おっとこんなことは君は先刻御承知だな。私の滞在目的は観光。東ドイツの生家を訪れるためにアメリカから帰ってきたんだ。

さあ、これで私の自己紹介はすんだ。今度はあんたの番だ」

「……………」

「ゲーレンかね。それとも……」

男がニヤッと笑った。

「いったい何を言ってるのか私にはさっぱりわからんね」

その時エレベーターのドアが開いた。ユルゲンスは乗り込んだが、男は動かなかった。エレベーターの中からユルゲンスが言った。

「二度と私の前に現われるなよ。礼儀知らずは大嫌いなんだ」

一階のロビーは人々でごったがえしていた。ロビーの隅にあるバー兼ラウンジは超満員で、そこからはみ出した客が、手に手にビールやシャンパンのグラスを持ってロビーにあふれ出ている。

「偉大なる祖国、ドイツのために！」人々は口々に叫びながら乾杯を繰り返す。その熱気の中をユルゲンスは足早に出口へと向った。

ホテルの外は中以上に騒々しい。行き交う車はクラクションを鳴らし、爆竹の音が耳をつんざくばかりに響き、人々は誰かれとなく抱き合っている。

タクシーに乗り込んだ。

「ブランデンブルク・ゲートまでやってくれ」

「パスポートはお持ちですか」

運転手がバックミラーをのぞき込んだ。

「こっち側でいいんだ」

「だけどブランデンブルク・ゲートは東ベルリン側ですよ」

「わかってる。とにかく西側につけてくれ」

運転手がうなずいて車を発進させた。ユルゲンスはシートに深々と身を沈めた。

「観光ですか」

運転手が訊いた。

「ああ」

気のない返事をしてユルゲンスは窓の外に目をやった。車はホフヤゲル通りに入っていた。

対向車はみなヘッドライトをウイंकさせながらクラクションを鳴らしている。真直ぐ前方に

“勝利の塔”が輝きを放ちながら夜空に突き出ている。

“勝利の塔”がある“六月十七日通り”の交叉点にぶつかると車は右に曲った。人の数が急激に増え始めた。大部分がユルゲンスのタクシーが向っている方向に歩いている。進むに従って人々の数はますます増え続け、歩道ばかりではなく車道をも占拠し、まるで歩行者天国の様を呈してきた。

「こりゃ何かの集会ですね」

運転手が言った。

「ベルリン・ウォールを壊しに行くんだろう」

運転手が笑った。ごくノンシャランな調子で言ったユルゲンスの言葉を冗談と受け取ったらしい。

車はゆっくりと走っては止まり、また走っては止まりの状態を繰り返した。「勝利の塔」から八百メートルほど進んで「アルト・モアビト通り」との交叉点にさしかかった時、車は完全に止まった。

「だんな、もうこれ以上は無理ですよ。ここでもかんべんして下さい」

確かに運転手の言う通りだった。そこから先は人の波で埋まり、到底車が進める状態ではなかった。きのうよりもはるかに人の数は多い。

ユルゲンスは金を払って外に出た。

二百メートルほど先に、ブランデンブルク・ゲートの上半分がその威風を誇示していた。ユルゲンスは人々の波に乗ってゲートに向って歩き始めた。

進むにつれて人の動きがゆっくりとなっていく。百メートルほど進むと前方に赤レンガ色の塀の一部がボンヤリと見え始め、同時に人の波が動かなくなった。

ユルゲンスは人々の間をぬって塀の方に進んだ。ブランデンブルク・ゲートにとりつけられた明りが塀をクッキリと映し出した。

ユルゲンスは立ち止まって正面を見すえた。ベルリンの壁……

「祖国はひとつ！」誰かが叫んだ。その声は次第に広がり、一大合唱となった。

“祖国はひとつ！”人々は人指し指を頭上で振りながら壁に向って叫んだ。しかし、壁の向うからは何の反応もない。ここまではここ三日間と全く変らないシーンだ。

ユルゲンスは腕の時計を見た。九時一分すぎ……ジャクソンは九時と言ったはずだ。東側にいるエージェントからの確認もとつたと言っていた。

突然、人々の合唱が止んだ。彼らの目は壁の上に吸いつけられた。そこにはひとりの男が片手に鉄槌を持って立っていた。つづいてまたひとり、さらにまたひとり、続々と壁の向うから現われた。息を飲んだのはユルゲンスひとりではなかった。一瞬の静寂……

最初に壁の上に現われた男が群衆に向って叫んだ。

「祖国はひとつ！」

次の瞬間、彼は思い切り鉄槌を振り降ろした。

周囲に飛び散るコンクリートの破片、そして群衆から湧き上った地面をゆるがすような大歓声。

壁の上の男たちの何人かがしゃがみ込んで群衆に手をのばした。それらの手にひっぱられて壁に登る西側の人々。打ち込まれ続ける鉄槌の響きは、共産主義への決別を告げていた。

ユルゲンスはまばたきひとつせずその光景を見つめていた。夢ではない、現実に行っていることなのだと思ひに言いきかせた。

妻と娘のことが想い出された。二十五年前の秋、雨の夜、高すぎた壁、機銃掃射でズタズタ

になった二人の死体、そして生きのびてしまった自分……

熱い涙がエルゲンスの頬を濡らした。

「エリザベス……エルケ……」

ささやくように言った。

「ごらん。もう越えなければならぬ壁はなくなったのだよ。やっと自由になれたのだ。お前たちの血で得た自由なんだ」

同じ頃、東側にあるブランデンブルク・ゲートの入口近くでひとりの中年の男が群衆に混って壁の上で展開される光景を見つめていた。その目は周囲の熱気とは対照的に冷めきっていた。
“祖国はひとつ”の合唱が壁の向うから聞えてくる。

夢ならさめてほしいと男は願っていた。

三週間前ホネッカー議長が退陣してから今に至るまで、祖国東ドイツは文字通り坂をころげ落ちるスピードで崩壊へと向った。その崩壊に、知らなかったとはいえ自分は手を貸してしまつた。スタズィの対外諜報局長の身にありながら、KGBの甘言に乗った自分が情なかった。

KGB第一局のイシコフ少佐の言葉が男の脳裏をかすめた。

「同志シュライバー、これは東ドイツと社会主義のためなのだ。ホネッカーをここで退陣に追い込まぬ限り、貴国と社会主義の将来はない」